

「UT³ 情報学環収蔵資料 [第1幕] 小野秀雄コレクション と坪井家寄託資料」資料紹介

添野 勉・山本拓司

1. はじめに

社会情報研究資料センターでは、2008（平成20）年10月、情報学環本館1階に「展示室」をリニューアルオープンした。情報学環ではこれまで、寄贈・寄託など多様な形で数多くの貴重な学術資料を収蔵してきたが、広く一般にその収蔵資料を公開し、研究成果の社会還元・情報発信を行うための設備の充実が課題とされてきた。この度、新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」の一環として展示室を整備する機会を得、同時に情報学環で推進されてきた21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」の成果をも取り込んだ展示をスタートすることができた。本稿では、そのこけら落としとなる「UT³ 情報学環収蔵資料 [第1幕] 小野秀雄コレクションと坪井家寄託資料」において展示中の資料を紹介する。

2. 小野秀雄と坪井正五郎

今回の展示の前半において紹介されている資料の旧蔵者である小野秀雄（1885（明治18）年－1977（昭和52）年）は、日本における新聞学の発展に中心的な役割を果たした人物である。小野は東京大学大学院情報学環の前身のひとつである新聞研究所（1992（平成4）年に社会情報研究所へ改組）の初代所長を務め、日本新聞学会（現・日本マス・コミュニケーション学会）の初代会長も務めるなど、今日のメディア研究の草創期を語る上で欠くべからざる貢献を果たしてきた。1885年、滋賀県栗太郡草津町（現・草津市）に生まれた小野は、東京帝国大学文科大学（ドイツ文学専攻）を卒業後、「萬朝報」「東京日日新聞」で新聞記者として活躍する傍ら、34歳で東京帝国大学大学院に入学し、新聞の研究を開始した。国内外において新聞の起源に関する資料を精力的に収集するとともに、欧米各地の新聞学研究機関の視察を行い、日本に新聞の研究教育機関を設置することに情熱を注いだ。その成果として、1929

（昭和4）年に東京帝国大学文学部に新聞研究室を、さらに三年後の1932（昭和7）年には上智大学文学部に新聞学科を設置した。終戦後、東京大学文学部新聞研究室は新聞研究所へと発展、それは現在の情報学環の源流となった。本展示でその一部を紹介した、小野が収集したメディア資料のコレクションは、現在でもメディア史研究はもちろん、歴史学的、美術史的、社会学的にもきわめて貴重な資料である。

一方、後半で紹介される坪井正五郎（1863（文久3）年－1913（大正2）年）は、人類学者、考古学者として知られた東京帝国大学の教授である。蘭方医坪井信良の子として1863年に生まれ、理科大学（現・東京大学理学部）在学中の1884（明治17）年、有志とともに人類学会を創立、二年後に大学院に進んで人類学を専攻し、1888（明治21）年夏に小金井良精とともに北海道の原住民アイヌの調査を実施した。翌年から三年間イギリスに留学、帰国後は帝国大学理科大学教授となり、人類学教室を創設した。自然科学的な人類学に留まらず、民俗学・考古学を含む幅広い人類学を実践し、考古学分野でも弥生式土器や埼玉県吉見などの横穴群の発掘、石器時代の貝塚などの調査を実施した。また日本石器時代人＝コロボックル説を唱え、小金井良精、白井光太郎らのアイヌ説と対立したことで知られる。夫人である直子の父は蘭学者として著名な箕作秋坪であり、長男誠太郎は地質学者、次男忠二は地球物理学者として知られている。

今回は東京大学でそれぞれの学問の黎明期を支えたふたりに関する資料から、特に学術的価値の高いと思われる資料を展示した。次節で紹介する今回の展示資料では、1～8が小野秀雄のコレクションからの出展、9～24が坪井家より寄託を受けた坪井家寄託資料からの出展である。多くが本邦初公開のものであり、江戸～明治期の学術研究やメディアの様態を今に伝える貴重資料である。

3. 展示資料



1. フルッグブラット (1530年)

報道を目的とした印刷物は、ドイツにおけるフルッグブラットが、もっとも早いものとされる。現存する最古のものは1482年のものといわれ、トルコ軍によるヨーロッパへの侵攻を伝えるものである。1453年のオスマン帝国による東ローマ帝国の征服は、ヨーロッパに脅威をもたらしており、1530年に発行された本資料は、前年のトルコ軍によるウィーン包囲の様子を報じている（表紙を入れて全26頁）。小野秀雄は、「新聞紙」が歴史に登場する以前の《情報》の形であったフルッグブラットやイギリスのブロードサイドと出会い、それを契機にかわら版などの収集を本格的に開始した。



2. 大坂安部之合戦図 (1615(元和1)年)

国内最古と伝えられるかわら版を、江戸時代後期に模刻したもの。大阪夏の陣の様子を描いたもので、上段には炎上する大阪城と逃げ惑い命乞いをする女房たち、中段に東西両軍の戦闘の様子が描かれている。実際にこの合戦の際に作られ、人々に読まれたものか、真偽のほどは定かではないが、この夏の陣を主題とした同様のかわら版は、徳川家に対する信頼が揺らいだ幕末期、豊臣家を顕彰する風潮の中で数多く制作された。



3. 北亜墨利加大合衆国人上官肖像之写 (1854(嘉永7)年)

ペリー艦隊の参謀長であり、幕府の使者との交渉を担当したヘンリー・アダムズ (Henry A. Adams) の肖像。ペリーを司令長官とするアメリカ東インド艦隊の軍艦(黒船)が浦賀に来航した1853(嘉永6)年以來、黒船の来航は日本に大きな衝撃をもたらし、蒸気船や外国人、外国語をテーマとするかわら版が数多く出回った。しかし、本資料に「アメリカ言葉」として紹介される言葉は英語ではなく、また何らかの言語に基づいているのかどうかも不明である。



4. 信濃国大地震 火災水難地方全図 (1847 (弘化4) 年)

1847 (弘化4) 年、信州上水内郡の虫倉山 (現・長野市鬼無里地区、上水内郡小川村・中条村にまたがる山) 辺を震源として発生した大地震の被害状況を伝えるかわら版。この地震では崩落した土砂によって犀川が堰き止められ、河道閉塞が発生、その後相次いで決壊して下流の千曲川流域が大洪水となり、民家は押し流され、数千人の死者が発生した。本資料は、それまでかわら版発行の中心地であった江戸 (東京) や上方 (大阪) ではなく、被災地である長野で発行されたものとされている。水色の箇所が洪水地域を示している。



5. じしん百万遍 (1855 (安政2) 年)

百万遍とは、多人数で輪になって大きな数珠を繰り送りながら「南無阿弥陀仏」の念仏を唱える行法のこと。輪の中央には音頭取りが座り、鉦を叩いて念仏の調子をとる。本文によれば、安政江戸地震で大きな被害を起こした地震鯨が詫びのため出家し、諸国行脚の旅に出る矢先、地震でひと儲けた人たちがやってきたところを描いたものである。彼らは地震鯨に音頭取りを頼み、地震の死者のために百万遍を行ったとされる。地震で儲けた人々は、服の文字から建築関係の職人・材木屋・医者・めし屋などとみられる。また画面上部には武士・町人・花魁など、地震で非業の死を遂げた人たちの幽霊が恨めしげに描かれている。



6. 東京日々新聞 第一号 (1874 (明治7) 年7月)

1872 (明治5) 年、東京で最初の日刊新聞が登場したが、その読者は漢文の素養がある知識人に限られていた。当時はまだ、煉瓦街や鉄道など文明の象徴や人気の俳優を色鮮やかに描く錦絵 (浮世絵) が庶民に馴染みの深いメディアであり、そこである絵草紙屋が日刊新聞紙「東京日日新聞」の創刊者のひとりであり絵師でもあった一恵齋 (落合) 芳幾らに協力を呼びかけ、新聞記事に登場したエピソードを錦絵版として売り出したところ、大好評を博した。この新聞錦絵では、病気の夫を抱えながら勤勉に働く貞淑な妻が、不幸な境遇から逃れようと通りすがりの僧に読経を頼んだところ、僧に襲われて斬り殺された事件が描かれている。「一号」というタイトルは、このニュースが本紙「東京日日新聞」の第1号に掲載された記事であることを示しているが、本紙の記事に依拠していることを示すことで、この話が実話であることが読者に強く印象づけられる仕組みである。衝撃的な赤を効果的に使ったおどろおどろしい表現は、絵師である一恵齋芳幾の得意業でもあった。



7. 明治八年大阪錦画新聞 第一号 (1875 (明治8) 年)

東京で火がついた新聞錦絵の人気は、すぐさま大阪にも飛び火した。しかし東京のような日刊紙が登場していなかった大阪では、引用元となる新聞紙名や号数が明示されず、また内容の面でも東京のような事実性よりは、読み物としての面白さが重視された。小野秀雄は、大阪で発行され、引用元の本紙を持たずに独自の題名と号数を持つものを「錦絵新聞」と呼んだ。



8. 近世人物誌 やまと新聞付録 第一天璋院殿 (1886(明治19)年)

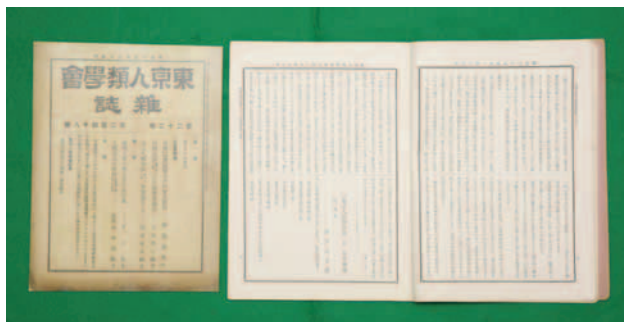
新聞錦絵の人気は長く続かず、1877(明治10)年にはじまる西南戦争では、戦況を知らせる様々な印刷物が流通するようになった。「読売新聞」などは、非知識人向けの記事にルビを振り、口語体で記すなど読みやすさを追求し、好評を博した。挿絵付きの新聞もこの時期数多く出現している。そうした中、新聞錦絵は、庶民向け報道メディアとしての優位性を急速に失う。1886年に「やまと新聞」の附録として登場した錦絵「近世人物誌」では、時事的な話題ではなく、かつて話題を集めた人物の回顧的な挿話が主題とされた。本資料は、1883(明治16)年に亡くなった天璋院(篤姫)を描いたものである。

※展示資料1～8は、「かわら版・新聞錦絵研究会」(1992 - 1999年、代表 吉見俊哉教授)の研究成果に基づいた。



9. 坪井正五郎博士肖像写真 (1910年頃)

晩年の坪井正五郎の肖像写真。坪井が教授を務めた人類学教室は、1893(明治26)年に帝国大学理科大学(現東京大学理学部)内に設置された講座で、坪井はその初代教授を務めた。当時の人類学は現在では人類学、民族学、考古学などの分野で扱われている対象を含んでおり、坪井研究室は小金井良精(解剖学)、白井光太郎(植物学)、山崎直方(地理学)、佐藤伝蔵(地質学)、有坂鋁蔵(考古学)、鳥居龍蔵(民族学)、松村瞭や石田収蔵(自然人類学)、柴田常恵(考古学)ら、以後の学問をリードする人材を多数輩出した。



10. 東京人類学会雑誌 (1906 (明治 39) 年)

東京人類学会は1884 (明治 17) 年に東京大学理学部の学生であった坪井正五郎、福家梅太郎、白井光太郎、佐藤勇太郎らが始めた研究会を源流とし、1886 (明治 19) 年に神田孝平を会長として発足した学会で、現在の日本人類学会の前身にあたる。当時の人類学は、現在民族学や考古学が扱っている範囲をも含めて幅広く研究の対象とした。機関誌『人類学会雑誌』は、坪井の死去を受けて1913 (大正 2) 年の28巻11号を「故坪井理学博士記念号」として年譜や著作目録、追悼文などを掲載している。



13・14. りうがく日記 (留学日記) (1889 (明治 22) 年)

「りうがく日記」は、坪井正五郎が1889年から1892 (明治 25) 年にかけてイギリスへ留学した時の様子をまとめた文書である。この文書は「日記」と題されているが、いわゆる日記の形態とは異なり、船による旅路で各地を見聞した内容や、ヨーロッパでの様々な経験などを自筆のイラスト入りで詳細に記録したもの。その記録した内容は家族へと郵送されたことから、「日記」の体裁を整えているものの、実態としては家族へ向けた外国見聞報告という性格をもつ資料である。全15冊が現存しており、今回はそのうちの第1巻と第2巻を公開している。



11・12. 小梧雑誌 (1879 (明治 12) 年、1883 (明治 16) 年)

『小梧雑誌』は、坪井正五郎が大学予備門・東京大学在学中に自筆で作成し、友人の間で回覧していた個人雑誌で、初期は『毎週雑誌』と題していた。1878 (明治 11) 年4月10日付の第1号から、1885 (明治 18) 年2月12日付の第68号までが10冊に合本されている。雑誌の内容は社説、学内行事の記録や掲示の転載、各種演説の筆記、紀行文、考証、考古学の調査報告、コラムや謎々、翻訳小説等に至るまで多岐にわたり、その多くは江戸時代の随筆風の筆致で綴られている。今回は第5巻26号と第9巻58号を展示した。



15. 尚友会人類学講義 (1903年頃)

尚友会とは貴族院の子爵議員の互選における多数獲得のため、清浦奎吾らによって1892(明治25)年に結成され、貴族院の最大会派である研究会の支持母体となった団体である。同会は子爵の大半を会員とし、無制限連記制の有爵議員互選選挙で圧倒的な勢力を確保し続けた。研究会は茶話会、無所属派とともに藩閥政府の支持勢力であったが、大正期になると原敬の両院縦断政策により立憲政友会との結びつきを強めていくことになる。坪井正五郎は尚友会の招きに応じて人類学の講義を行っており、その際の清書された講義録が多数残されている。



16. いきとしいけるもの (年代不詳)

「いきとしいけるもの」は、坪井正五郎が生物の解剖図を描いたスケッチ集である。和綴じの冊子に緻密なカブトガニやオタマジャクシのスケッチなどの図版が描かれ、欧文の説明が付されている。坪井は他の資料でも詳細なスケッチを残しており、描写力・観察力にきわめて優れた人物であったことがうかがい知れる。



17・18. 坪井正五郎肖像写真 (年代不詳)

若き日の坪井正五郎と、研究室の坪井正五郎を撮影した写真。前者の写真台紙裏面には、撮影した写真館の名前として「玉潤館」と記されている。この写真館を経営していた小川一真は、明治時代後半の日本を代表する写真師であり、日清戦争・日露戦争の記録写真集の出版や日本の文化・風俗を海外に紹介する数多くの写真帖を出版した。著名人の撮影も数多く行っており、この写真から坪井正五郎もその顧客であったことがわかる。



19. 坪井理学博士の今昔 (年代不詳 (1902 年以降))

坪井正五郎の風貌の変化を子供時代からの写真で比較した雑誌記事。人間の風貌から何ものかを汲み取ろうとする考え方は当時の人類学において広く実践されており、そのような視点からこの記事が編集された可能性もある。



20. 南葵文庫講演風景写真 (1909 (明治 42) 年)

南葵文庫は、文化財の保存に熱心で人類学・考古学などにも造詣の深かった旧紀州藩主徳川頼倫侯爵により、麻布区飯倉の同家邸内に設立された私設図書館で、漢籍などを中心に 10 万冊弱の図書を開示していた。坪井正五郎はここでも講演を行っている。なお、南葵文庫の蔵書は 1924 (大正 13) 年、前年の関東大震災により図書館に大きな被害を受けた東京帝国大学にそのすべてが寄贈され、現在では東京大学総合図書館の蔵書の一角を形成している。



21. 樺太調査旅行絵葉書 (1907 (明治 40) 年)

坪井正五郎は 1907 年夏、人類学調査のため石田収蔵、野中完一を伴い、ロシアから日本へ割譲されたばかりの樺太を旅行した。7 月 6 日東京を出発、13 日に小樽からコルサコフ (大泊) に渡り、クスンナイ、マウカなどをめぐって 8 月 28 日まで樺太に滞在、9 月 1 日に帰京した。坪井が樺太から出した絵葉書からは、樺太で講演を行ったことや、石器や土器からアイヌの遺骨に至る種々の資料を収集したことなどを知ることができる。



22. 坪井正五郎追悼絵葉書 (1913 (大正2)年)

坪井正五郎は三越百貨店との関係が深く、顧問的存在として早くから同社の種々の文化事業に参画、その一環として種々の知育玩具を考案した。右上の知育玩具が数多く掲載された絵葉書に見える「うさぎとかめ」は、兎と亀を駒とし、それぞれに割り当てられた二種類のサイコロを使用して遊ぶ双六の一種である。坪井は他にも回転させると衣装が替わる人形「マーストヘンゲル (回すと変化する)」や、浮沈子の一種である「ういてこい」等の玩具を考案した。坪井のユーモア溢れる人間性は右下の直筆の絵を元にした絵葉書からもうかがわれる。これらの絵葉書は坪井が1913年、ペテルスブルグにおける第5回万国学士院連合大会に出席のためロシアを訪れた際に現地で病に倒れ、同市内のアレキサンドリア病院において客死したことを追悼する絵葉書である。



23. セントルイス万国博覧会賞状 (1904 (明治37)年)

セントルイス万国博覧会は、1904年4月から12月にかけて、アメリカ合衆国ミズーリ州セントルイスにおいて行

われた万国博覧会で、世界44カ国が参加する大規模なイベントとして開催された。参加国のうち、21カ国は政府館を建設して自国を積極的にアピールしており、日本にとっては開催時期が日露戦争と重なったことから、非常に重要視された万国博覧会であった。自国イメージの向上はもとより、帝制的性格を前面に出したイメージ作りは外交面に寄与し、坪井正五郎が行った人類学に関する展示は、金賞を受賞した。



24. 坪井誠太郎のトランク (年代不詳 (1920年代?))

坪井正五郎の息子、坪井誠太郎が使用したトランク。坪井正五郎の関係資料はこのトランクをはじめとした収納用具に保管されていた。トランクは第二次世界大戦後まで使用されており、フルブライト奨学生であった坪井正五郎の孫も使用した。

4. おわりに

今回紹介した展示資料に関する諸情報は、展示室の閲覧用ユビキタス端末からほぼ同じ内容を知ることができる。しかし、ユビキタス端末で取得可能なデータはこれに留まらず、坪井家の資料所蔵者自らによる資料の説明動画や、各資料の全部・一部に書かれている内容の音声と文字情報による紹介、関係画像の表示など多岐に亘る。本稿で今回の展示内容に関心を持たれた方は、ぜひ社会情報研究資料センターの展示室へ来場の上、ユビキタス端末を通じてより豊穡な資料の世界を覗いていただければ光栄である。

※本稿の作成にあたっては、富澤達三氏 (神奈川大学非常勤講師)、21世紀COEリサーチ・アシスタントの松田好史、山下大輔両氏の協力を得た。

(添野勉・情報学環特任助教)(山本拓司・情報学環特任助教)

センター情報

■社会情報研究資料センター長

平成 20 年度 情報学環学際情報学府 馬場 章

■社会情報研究資料センター運営委員会委員

平成 20 年度の委員の方々です。

馬場 章 (委員長 情報学環学際情報学府)

石上 英一 (史料編纂所・情報学環学際情報学府)

石田 英敬 (総合文化研究科・情報学環学際情報学府)

林 香里 (情報学環学際情報学府)

丹羽 美之 (情報学環学際情報学府)

権島 榮一郎 (情報学環学際情報学府)

辻本 篤 (情報学環学際情報学府)

■アメリカの新聞 3 紙のオンライン・データベースの提供について

2008 年 4 月から、New York Times、Washington Post、Los Angeles Times のオンライン・データベースが東京大学の学内で利用可能になりました。本センターの提供によるものです。

■「産経新聞」マイクロフィルムの購入

2001 年までで購入の止まっていた「産経新聞」マイクロフィルムの 2002～2007 年分を購入しました。

■『文芸広場』で本センター紹介される

教職員の文芸誌『文芸広場』2008 年 12 月号の「研究所めぐり (89)」で本センターが紹介されました。

■新規受け入れ資料 (復刻版)

- ・『国際映画新聞』1 号～282 号 (昭和 2～15 年)
- ・『朝日新聞外地版』昭和 10～14 年
- ・『スターズ・アンド・ストライプス』(中部太平洋版)
1 巻 1 号～222 号 (1945～46 年)
- ・『日本画報』1 号～42 号 (明治 37 年 6 月～明治 39 年 10 月)
- ・『グラフィック』1 号～83 号 (明治 42～45 年)
- ・『満州グラフ』1 号～5 巻 (1933～1937 年)

■2009 年度新規導入予定データベースの紹介

下記のオンライン・データベースを 2009 年 4 月から提供予定です。

センター閲覧室の端末でご利用になれます。

☆ The Times Digital Archive 1785-1985

「ロンドンタイムズ」の創刊から 200 年間の全紙面のフルテキストデータベース。

☆ American Film Scripts (アメリカ映画の名作 1000 本の脚本データベース)

映画脚本のテキスト本文と PDF 版を収録。シーンや登場人物等の多様な検索が可能。

主な作品:「オズの魔法使い (1939)」「カサブランカ (1942)」「雨に歌えば (1952)」「理由なき反抗 (1955)」「ベン・ハー (1959)」「タクシー・ドライバー (1976)」等。

☆ Film Indexes Online

以下の 3 つのデータベースの横断検索が可能。

- ① AFI Catalog・・・アメリカ映画協会作成のデータベース。
- ② FIAF International Index to Film Periodicals・・・国際フィルム・アーカイブ連盟作成の文献データベース。
- ③ Film Index International・・・英国映画協会作成の映画データベース。